



ケアマネジメントの現場から

管理者・主任介護支援専門員 豊永 勝也さん *Toyonaga Katsuya*

医療法人玄州会 居宅介護支援センター（長崎県壱岐市）

壱岐市出身。玄州会が運営する老健に、平成8年相談員として就職。介護保険スタート時にケアマネジャーと社会福祉士を取得し、法人新設の居宅支援部門に異動。平成24年に法人内の3事業所が統合され、その管理者に着任する。



離島の厳しい環境下でも、 前向きな在宅支援に力を尽くす

緊急手術を要する際、 ヘリでの患者搬送も

福岡・博多港から高速艇で約1時間。青々と広がる玄界灘に壱岐島が姿を見せ始める。壱岐市はこの壱岐島をはじめ、周囲21の小さな島々からなる。

人口約2万9000人で高齢化率は約32%、65歳以上高齢者のうち、要支援・要介護の認定を受けた人の割合は20.7%に達する。ともに全国平均を数ポイント上回っており、そうした高齢者のなかには、親族が島外に移住して現在は一人暮らしという人、あるいは同居家族と一对一の生活をしている人も多い。

島内の港で最も大きな郷ノ浦港に、今回取材する豊永勝也さんが出迎えてくれた。午前9時すぎ、港へ到着した高速艇からは、我々取材者とともに通勤風の乗客も数多く下船する。その様子を見つつ豊永さんは、「この船に乗って、島内の病院に通勤してくる医師も

多いのです」と説明してくれた。

壱岐のような離島では、医療・介護の人材が慢性的に不足している。「看護師を募集してもなかなか集まらないのが悩みの種」という。我々が港で見た「医師が島外から通う」シーンもそうだが、離島ならではの受け皿整備の厳しい実情が浮かんでくる。

豊永さんが所属する医療法人は、内科・循環器科を中心とした総合病院が母体だ。ただし、急性の脳血管疾患などで手術が必要な場合は、長崎市や福岡市の病院に頼らざるを得ないケースもある。緊急の際、患者をヘリで搬送するのもよくある光景だ。

そのまま島外入院した高齢者が退院した後、自分の生まれ育った島で今までと同じように暮らしを継続するために、壱岐島内のケアマネジャーたちは、在宅復帰後のサービス調整に奔走する。豊永さんの事業所にも、病院の相談室などから指名でケアマネジメントの依頼がくることが多い。

利用者の様子を 画像や動画で交換

たとえば、在宅復帰を予定している利用者が、手術を受けた島外病院で急性期リハに入るとする。その様子などを直に見ながら退院後のサービス調整を図るのがベストであるが、入院中からケアマネジャーが島外の病院に出向くことは、交通などの問題もあって極めて難しい。

いったん島内の老健施設に入所し、その間に時間をかけて情報収集を図る方法もある。しかし、壱岐市では高齢者人口約9000人に対して老健が2カ所しかない現状もあって、常に満床に近い状態にある。そのため、いきなり病院から在宅復帰というケースも少くない。

「ですから、ご本人の入院中から病院側と頻繁にメール交換をしたり、画像や動画をやり取りしながら情報共有を進め、退院後の生活にできる限り不具合がないよう努力します」と豊永さん。

病院側のPT・OTからリハビリの様子などが動画で送られてくる。こちらからは、利用者の住宅環境（特に、想定される動線）などの画像を送る。その上で、「どのような住宅改修が適切か」「どんなサービス導入が求められるか」という調整を図る。そうしたケースが年に数回はあるという。

また、病院から直接在宅へとなる場合、状態像が不安定な利用者も多くなる。その際、見極めなければならないのが、本人と家族が一對一といった場合の「家族の介護力」だ。

豊永さんが管理者を務める同事業所には、他に5人のケアマネジャーがいる。その1人で



壱岐島は長崎県であるものの、都市部へのアクセスは「若干、福岡の方が便利」（豊永さん）。長崎空港へは飛行機で30分の距離だが、運航が1日2便のため、本数が比較的高速艇（70分）やフェリー（140分）で博多出る人が多いようだ。



主任ケアマネジャーの資格をもつ松永律子さんは、「（末期がんなどの利用者もいるなか）在宅に戻ったとして、看取りもそこで行えるのか、やはり最期は病院に頼らざるをえないのか、ご家族の気持ちも揺らぎがちです」と言う。

「ご家族の意向を何回も確認しつつ、こちらから病気の見通しなどの情報を共有していきます。その上で、『大丈夫、一緒に頑張っていきましょう』と精神面のフォローを常に忘れないようにしています」

豊永さんの担当では、難病の患者もいる。「ご本人に気管切開などの意思表示の確認を行っても、揺れ動いてしまうのは当然です。ご家族の場合も当初は混乱が著しく、本当に家で看ることができるのかという思いが先に立ってしまいます」（豊永さん）

頻回な喀痰吸引などが必要になる場合、これは離島に限ったことではないが、訪問看護だけで対応するのは難しく、喀痰吸引の研修を受けている介護職もまだ多くない。どうしても、家族の力に頼らざるを得ない比重が増える。



豊永さんたちが所属する法人は、病院に施設、訪問・通所サービスと、島内唯一の社会資源をもつ。そのため、行政や地域からの期待も非常に大きい。同じフロアには、訪問看護とヘルパー事業所が並んでおり、特に看取り時などは連携が取りやすいそうだ。同僚の主任ケアマネジャー、松永律子さん（写真中）と福原拓人さん（写真右）。

「その場合、ご家族にどう説明するかは本当に難しいですね。とにかく情報をきちんと伝え、辛抱強くご家族の訴えを聞くしかありません」と、豊永さんは厳しさを語る。

一歩先にある家族負担に 目を配ったサービス活用

この日、豊永さんは、娘と2人暮らしという利用者宅へ、モニタリング訪問のため車を走らせた。山内シンさんは95歳と高齢だ。要介護度は2で、日常生活動作に関しては、屋内で杖歩行をしたり、娘の介助で家の周囲を散歩することはできる。

だが、娘と2人きりになると認知症と思われる症状も出るという。最近、屋内で転倒して外傷を負った事故もあった。今後、介護する娘の負担が少しずつ高まる可能性もある。

現在、利用しているサービスは週2回のデイ、それに、娘が島外に定期的な用事があるて出かけていく際のショートステイだ。

部屋に入ると、シンさんはベッドに横になっていた。「デイサービスでは、何をしよるのですか？」という豊永さんの問いかけに、「午前は体操して、3時頃からカラオケしてま

す」としっかり反応する。

シンさんが通うデイは、玄州会による「パワーリハビリテーションセンター光風」。島内には9カ所の通所サービスがあるが、そのうちの4つを同法人が運営している。デイケアを含めてそれぞれに特徴があるが、「パワーリハ光風」は比較的軽度の人を対象として、本人の意向や状態像に応じて、日々多様な個別プログラムを備えているのが特徴だ。

やり取りを聞いていた娘は、「デイサービスから帰ってくると、本人は『今度行く日はいつだっけ？』と言います。それだけ楽しみにしているんですね」と笑う。

気になるのは、「今の時期は寒いので、（デイ以外では）外に出ていない。最近は足も痛い」という本人の訴えだ。認知症の進行も含め、先行きのリスクを頭に入れなければならない。同居する娘のレスパイトも重要な課題となってくる。

「ご飯はどの場所で食べますか？」「今の時間帯はどうしてますか？」と豊永さんは、できるだけ具体的な生活状況をイメージすべく、雑談を交えながら質問を重ねた。豊永さんによれば、「会話の流れのなかで自然に質問するように意識しています」とのことだ。



デイサービスでの様子を話すシンさん。当初は気乗りしなかったデイだが、今では「楽しい友だちがいるし、職員さんもかわいい」という（写真上）。七夕の寸劇で織姫役をしたときのシンさん（写真下）。

本人との会話が流れてくると、「ちょっと起きてみましょうか？」と離床を促し、ゆっくりと居間の椅子へと誘導した。そのときの動作状況にも目を配る。

「来週、デイの人たちと一緒に、近所のスーパーにお買い物に行くんですって」と娘がいう。「ほお、それはよかですね！」と豊永さんは笑顔で返す。デイでのさまざまな活動が、本人にも家族にもいい影響を与えている様子が伝わる。

シンさん宅を出た豊永さんは、その足で本人が通う「パワーリハ光風」へ向かった。そこで生活相談員を務める大久保眞智子さんに、デイでのシンさんの様子を尋ねる。

同デイでは、利用者の日常の細かい様子を写真で保管している。大久保さんは、利用者

が演じた寸劇の写真を取り出して豊永さんに見せた。「職員や他の利用者とかかわりができたことで、少しずつ皆さんと一緒に楽しめるようになりました」と大久保さん。サービス利用当初はソファで横になっている状態が多かったが、それが今では一変した。

親族間の調整をどうする？ ケアマネができること

ケアマネジャーにとって家族支援は課題の一つだが、そのなかでは、お金の問題もネックになりやすい。家族としては、最初は自分たちも介護をやるつもりで利用料負担などを計算する。しかし、それが徐々にきつくなると、必然的にフォーマルなサービスが増え、その費用が少しずつ気になるようになる。

「彦根市の場合、もともと農業・漁業従事者の人が多く、基礎年金だけで厚生年金の上乗せがないケースも多い」と豊永さん。経済的負担は世帯内で想定以上に膨らんでいき、そのあたりも考慮しないと、「これ以上払えない」となりかねない。

それだけならまだしも、そうしたお金の問題をめぐって親族間でもめてしまい、さらに同居家族のストレスを高めるケースもある。

「ご家族に呼び出されて、何事かと思ったら、もめ事の間に立たされたこともありました。ケアマネとして深入りすることはできないので、事情をゆっくりと聞いた上で、必要があれば、成年後見制度などをわかりやすく説明したりします」と豊永さんは、家族調整の実態を語る。

ケアマネジャーとして対処する術は限られる。だが、「とにかく訪問頻度を上げて、家族



介護保険事業所連絡協議会の役員会。この日、豊永さんは、そろそろ組織の新陳代謝を図るべきという意図から役員の交代を提案した。豊永さんの奥に座っているのは、社会福祉士の実習に来た西川佳央里さん。竜崎市出身で、現在は福岡の学校に通っている。

の話を聞くことが大切」と、豊永さんの同僚である福原拓人さんはいう。

「退院直後などは、2日に1回は訪問したり、近くまで行った際には立ち寄りたりします。こちらが話を聞くだけで『すっきりした』と言われるケースもあります」

在宅を支える家族には、見た目以上にストレスが募っていて、常に「誰かと話したい、頼りたい」という強い思いがある。「それにしっかり対応していくことも、ケアマネの大切な使命だと思います」（福原さん）

「今ある資源」で、 最大限のことを模索する

竜崎では、「認知症の人の徘徊があった場合、それを見守る徘徊ネットワークはあるが、地元消防団も積極的にかかわったり、防災無線などをフル活用するといった仕組みもある」（豊永さん）という。インフォーマルな部分での支えはそれなりにしっかりしている。

問題は、そうした多様な資源がしっかりネ

ットワークを構築できるかどうかにある。この課題意識をもちつつ豊永さんは、竜崎市の介護保険事業所連絡協議会において会長を4年務めている。豊永さんは、竜崎市直営の包括センターの立ち上げに際し、4年間出向していた経歴もあり、地域全体の資源向上へのこだわりは強い。

取材した日の午後、その連絡協議会の役員会が開かれた。メンバーは会長の豊永さんほか、市内6カ所ある居宅から3名が副会長として参加。前年度の事業実績の確認、新年度の事業計画などを話し合った後、メンバーの1人が地域の実情を話し始めた。

それは高次脳障害の利用者に対し、訪問リハを提供したいというもの。竜崎市には現在訪問リハがないため、訪問看護で対応することになる。だが、下肢筋力の低下などを防ぐ上では、本来リハ専門職の訪問が望ましい。

そこで豊永さんは、こんなアドバイスをした。「（手弁当になるので）頻繁にというわけにはいかないけど、通所リハのPTさんをお願いして在宅での状態や家屋環境を見てもらい、それを通所リハの訓練に活かしたり、ご家族に対して家庭でのリハビリ指導などをするという方法はありますね」。

厳しい現場状況のなかで、それでも「今ある資源」で何とか利用者を支えなければならない。島内のケアマネジャーすべてがプレッシャーを受けるなか、役員の一人は「豊永さんの器の大きさに助けられている」と話す。

事業所の枠を超え、地域で頼られる存在を担うこと。制度の行方が不透明感を増すなか、豊永さんのような存在が、地域の安心づくりのために欠かせないものとなっている。

（介護福祉ジャーナリスト 田中 元）

今回の取材地、壱岐市はこんなところ

玄界灘に浮かぶ離島、長崎県壱岐市。南北17km、東西14kmと端から端まで車で1時間というこの島は、現在高齢化と過疎化に直面している。

島の主な産業は漁業と農業。漁師や農家が集まる地区は、隣近所の結びつきが強く、「支援の手を差し出すタイミングが難しい」（豊永さん）。ちなみに、春先に吹く強い風“春一番”は、元々、壱岐の漁師たちが使っていた言葉だとか。



壱岐の名勝レポート

名勝① 猿岩

本当に猿にしか見えない。
近くのベンチで、間近に鑑賞ができる。



ベンチの先には
崖があります。



名勝② 鬼の足跡

海岸浸食でできた、高さ30m、周囲110mの大穴。
穴の周囲はフリーに散策できる。



道幅
30cmの
ところも。



島全体が国定公園指定の壱岐島。しかし、壱岐の観光地にはなぜかほとんど柵がない。風も強いので、写真撮影時には自然と下半身が引き締まる。高齢者や子連れの際には注意したい。

